

「日本3.0」

Vol.15

小池氏の失敗に見る 「リーダーの3つの教訓」

text by Norihiko Sasaki

文 佐々木 紀彦

前回の連載では「小池旋風の後に試される『日本の知』」とのタイトルで、「小池フィーバーによる破壊の後にこそ、新しい日本を創る知が試される」と記しました。しかし、小池氏は、日本政治を破壊する前に、自分自身を破壊してしまいました。

さすがに「もう少しはブームが持続するはず」と思っていましたので、これほど早い撤退は予想外でした。

今回の小池氏の失敗は、リーダー論として多くの示唆がありました。

一つ目は、人は苦手なことではなく、得意なことでも失敗すること。小池氏の最大の強みは、メディア対応スキルとしゃべりです。かつて小池氏にインタビューした際、ユーモアも含めて、「私は小池エージェンシーの社長なのよ」と言っていました。電通、博報堂などの広告代理店と同じように、自分分は広報・マーケティングのプロだと言いたかったのだと思います。

しかし、そこに自信を持ちすぎたがゆえに、「排除」というNGワードを使ってしまった。あのとき「排除」と言わずに、「憲法など主要政策が一致する方々に、ぜひ来ていただきたい」と前向きなトーンで言えば、何の問題も起きなかつたはず。

二つ目は、リーダーは自分のために人生をかけてくれる同志を持たないといけないということ。小池氏を知る人に話を聞くと、とにかく裏切る、側近がいけない、という話ばかりが出てきます。今回も、一世一代の大勝負に出るにもかかわらず、傍らには若狭勝氏や

細野豪志氏といった付き合いの浅い議員しかいませんでした。秘書など身近な右腕にも恵まれませんでした。いかに同志を育ててこなかったかということがよくわかります。

三つ目は、今後のリーダーは、自律的な組織を創れることが求められているということ。企業社会でも、一時期のカリスマ型リーダーブームが去り、「羊飼いのリーダー」の時代が来つつあります。羊飼いのリーダーとは、みんなの先頭に立ってビジョンを掲げ、斬りこみ隊長として戦うよりも、後ろからみなを支えて、各メンバーが強みを発揮できるような環境や文化をつくれるリーダーです。弱みもさらすし、自分が苦手なことがあれば、メンバーに任せていく。けれども、最後の意思決定は行い、責任もしっかりとります。

この意味でも、小池氏はカリスマ型、独裁型にこだわりました。今回の小池氏の失敗は、未来のリーダー候補生にとって格好の教材となるはず。



Profile

NewsPicks編集長

1979年福岡県生まれ。慶應義塾大学総合政策学部卒業、スタンフォード大学大学院で修士号取得(国際政治経済専攻)。東洋経済新報社で自動車、IT業界などを担当。2012年、「東洋経済オンライン」編集長に就任。リニューアルから4カ月で同サイトをビジネス誌系サイトNo.1に導く。2014年7月から経済ニュースサイト「NewsPicks」の編集長を務める。著書に「米国製エリートは本当にすごいのか?」「5年後、メディアは稼げるか」がある